

## 本荘第一病院 薬剤科

薬剤長 佐々木 のり子

当院薬剤科の紹介は平成12年に一度ご報告いたしました。それから早10年を超える時間が過ぎたと思うと感慨ひとしおでございます。前回の紹介事項と違ったところといえば、入院患者に対してDPC（包括医療）を採用したこと、院外処方せん発行率が9割を越えたこと。また外来については電子カルテが導入され、入院については、オーダーリングシステムが導入されたことです。



NSTのデータチェック・奥では薬剤の発注

IT化が推進されたことで、薬剤科もSPIIシステム（高園産業薬剤科管理ソフト）のバージョンアップを図り、薬剤科業務内容充実化・効率化を大幅に図りました。薬剤師6名、調剤助手2名となりました。以前は薬剤管理指導業務担当者1名でしたが、4病棟の管理にたいして、3名の薬剤師を当てることにより、多くの薬剤管理指導業務を実施することが可能となりました。



病棟で医療スタッフとディスカッション



肝機能悪いですね、腎排泄薬に変更は？



配合変化は？

研修医教育病院、病院機能評価更新等、日常業務以外にも多くの業務を各1人1人の薬剤師が担っています。毎日時間が足りないと、薬剤科の職員は走り回っています。



期限は？ここに新採用薬を並べて



今日のミキシング多くて大変

調剤助手に至っては、注射剤配合禁忌表作成（作成済みを薬剤師がチェック）、不動態在庫一覧表（在庫一覧資料作成）、薬剤発注業務等にも欠かせないスタッフとなりました。今年4月からは医療費改定となり、病棟業務に更なる厚いペイが付くのですが、ベビーラッシュ（とても喜ばしいことです）が当薬剤科を覆っています。マンパワー不足で失速しますが、スタッフが又現場に戻ると、色々な取り組みが展開できると思います。忙しくて泣きそうになることも多いのですが、医療スタッフからの「薬剤師さんこれってどういうことかしら？」の質問、患者さんから「ここは薬剤師さんも来てくれて、本当に親切な病院ですね」の言葉。疲れを忘れて、「お薬手帳はありますか？」「他の医療機関のお薬を何か飲んでいますか？」ベッドサイドに行き患者さんへのインタビュー開始。調剤室では、外来抗がん剤投与開始の際には、患者さんの指導をします。そんな中、病院側に薬剤師を雇ってくださいとお願いしても「薬剤師は人件費が高いから」と却下されてしまいます。早く病院薬剤師の技術料が上がり十分なマンパワーが確保できるよう祈っている毎日です。